

パナソニック教育財団の実践研究助成による取り組みを充実させるために

「研究発表会」開催の手引き

はじめにー学校における実践研究の振り返りやアイデア収集に向けてー

「研究発表会の開催は負担だ。」「学校外の人に見せる授業はやっていない。」という声を聞くことがあります。けれども、「研究発表会」開催の意義は、それをどのような営みであると定義するかによって、大きく変わります。研究発表会は、完成された授業や完璧な実践研究を誰かに示すためのイベントではありません。それは、実践研究の振り返りが促される機会（自己評価、相互評価）であり、授業改善のための新たな視座を得られる舞台（外部評価）なのです。

もちろん、そのように、研究発表会が学校における実践研究のいっそうの充実に資するものとなるためには、そのデザインや開催に向けた準備に、工夫が必要です。多くの参加者が集まれば、それでよいわけではありません。授業やカリキュラムに関する実践的なアイデアが豊かに交流され、開催する側も参加する側も得るものが多い研究発表会は、どのようにして成立するのでしょうか。

この手引きは、その秘訣をまとめた、「ハンドブック」です。Ⅰ章には、研究発表会開催の意義とその検討ポイントがまとめられていますし、Ⅱ章には最近の研究発表会の実践動向やその多様性が記されていますので、それらを確認してください。Ⅲ章には、ある学校の研究発表会の開催事例が、その評価結果とともに、ていねいにレポートされています。研究発表会の可能性と課題を興味してください。そして、Ⅳ章には、Ⅲ章の事例と同じ学校の教師たちが、研究発表会開催前後にどのような研究活動に従事していたのかが記されています。各学校の研究推進リーダー等にとっては、参考になる部分がたくさんあるでしょう。

なお、実践研究全般の企画・運営について詳しく学びたい場合には、拙著『教員が磨き合う学校研究』（ぎょうせい、2006年）をご覧ください。

また、財団等の支援を受けて編者らが作成・公開している「学校研究推進に関する Q&A」(http://www.pef.or.jp/oyakudachi/index.html#yakudachi_1) にアクセスしてください。

平成 21 年 3 月

「手引き」編集責任者：木原俊行（大阪教育大学・教授）

目次

はじめに	1
Ⅰ．「研究発表会」開催の意義とその検討ポイント	2
Ⅱ．「研究発表会」開催の実践動向	4
Ⅲ．「研究発表会」の事例分析	12
Ⅳ．「研究発表会」の開催に向けたアクション	18
資料	36

I. 「研究発表会」開催の意義とその検討ポイント

1. 「研究発表会」開催の意義

学校における実践研究（以下、学校研究）は、授業改善、学校改革を志向した教育実践の探究活動である。研究活動であるから、当然、試行錯誤の繰り返しを伴う。そして、その過程において、研究の成果と課題を多面的に、連続的に評価しなければならない。学校研究のそうした評価活動には、1学期末に着手すべき授業実践記録の整理、夏期休業中に試みるべき学力調査の結果分析等があげられよう。

本小冊子でその企画・運営を論述する「研究発表会」も、学校研究の過程や成果を省察し、その充実への視座を得るための評価活動に位置づくものである。これは、上述したものとは異なり、同僚以外の教員、教育行政関係者、保護者や地域住民、そして専門家などの目を通じて取り組みの成果と課題を明らかにするための「外部評価」である。

2. 「研究発表会」開催にあたっての検討ポイント

研究発表会を開催して、授業やカリキュラムに関する評価をいっそう充実させたいと願うならば、そのプログラム、公開される授業の数や内容、開催に関する情報発信の方法等がていねいに検討されねばならない。具体的には、次のような5つの観点（25の項目）で、研究発表会のデザインやそれに至るアプローチを点検すべきであろう。

（1）案内

- ①早い段階から、開催時期等が案内されている。
- ②複数の方法で、開催が案内されている。
- ③案内では、研究会の特長や魅力がアピールされている。
- ④最終的な案内では、研究テーマや公開授業の内容が詳しく説明されている。
- ⑤案内には、実践の内容や研究発表会のプログラム等を事前にたずねるための連絡先等が示されている。

（2）プログラム

- ①研究のテーマや進捗状況を踏まえて、プログラムが組まれている。
- ②プログラムの各活動の時間設定や順序等が適切である。
- ③研究発表会の最初にオリエンテーションを開催するなどして、参加者が研究発表会で実践情報を十分に収集できるよう配慮されている。
- ④学校の研究発表に関して参加者が意見を積極的に述べるような機会と仕組みが、用意されている。
- ⑤公開授業、研究協議会、全体会の内容を関連づけるための工夫がある。

(3) 公開授業

- ①研究テーマに即した授業が公開されている（指導案にその関係が記されている）。
- ②研究テーマを具体化した、多様な授業が公開されている。
- ③それぞれの授業者が、授業展開や学習活動、学習環境等に工夫を凝らしている。
- ④指導案の書式が工夫され、授業者のねらい等が伝わりやすい。
- ⑤掲示等が工夫され、公開される授業だけでなく、その前後の授業、その他の単元の授業に関する実践情報を入手できる。

(4) 研究協議会

- ①最初に、研究協議会のねらいや進行が確認されている。
- ②プレゼンテーション、配付資料、ポスター等により、公開された授業の特徴、その背景などが説明（情報提供）されている。
- ③公開授業についての検討、それを踏まえた発展的な問題の検討のバランスがよい。
- ④研究協議会の参加者から積極的に意見が出てくるように、その運営や進行が工夫されている。
- ⑤振り返りの機会が確保され、参加者が自身の授業づくりについて省察を繰り返される。

(5) その他

- ①全体会場や廊下等の掲示・展示を工夫して、参加者が情報やアイデアを得られる可能性を高めている。
- ②研究紀要を多くの教職員が執筆しており、総論編の執筆内容と各学年や各教科編のそれとの分担や関連づけが図られている。
- ③研究紀要に、研究の過程や成果に関するデータが載っている。実践上の悩みや課題も記載されている。
- ④研究発表会後に、参加者が学校に対して質問や意見を投げかけられる仕組みが用意されている。
- ⑤アンケートの実施等によって、研究発表会の内容や構成をていねいに評価しようとしている。

この25項目の点検ポイントは、研究発表会の案内から当日のプログラムの評価までを網羅している。それゆえ、例えば、これから研究発表会を開催しようとする学校の研究推進リーダーにとっては、その準備の進捗状況を点検するのに役立つ。

また、参加して得るものが多いのは、上記のような項目を満たしている研究発表会であることは自明であろう。それゆえ、あまた催される研究発表会のどれに参加すべきかを判断するための指標として、より多くの教師たちが活用可能であろう。

Ⅱ. 「研究発表会」開催の実践動向

1. 「研究発表会」開催に向けた教師たちの熱意

我が国の学校の教師たちは、伝統的に、学校研究の成果公開や外部評価の機会として、研究発表会の開催を尊んできた。例えば、合科学習の実践で著名な奈良女子高等師範附属小学校では、機関誌「学習研究」の発行によって同校の実践に関する情報を積極的に発信するとともに、年2回の講習会の開催によって、自らの実践を積極的に公開していた。中野によれば、当時の同校のリーダーたる木下竹次が主著『学習原論』を刊行した年度の同校参観者は、2万人を越えていた（中野光『教育名著選集⑥ 大正自由教育の研究』黎明書房、1999年）。

今日、その伝統は、どのように継承されているであろうか。開かれた学校づくりや学校の説明責任といった社会的要請の下、その数は、増えているように思う。ある地域では、研究発表会を開催する学校の数が多すぎて、同じ日に、いくつもの学校のものが重なり、教師たちがどこに行けばよいのか逡巡するという事態が生じている。教育委員会のスタッフや大学研究者が研究発表会に参加するため、日程調整に腐心する姿も、そう珍しくはない。

同時に、その内容は、多様化している。旧来の研究発表会でよく目にしたメニューである、公開授業（とそれに関する研究協議会）、その後に研究発表と講演会という「3（4）点セット」をプログラムに据える学校は、今なお、少なくない。しかしながら、それらに加えて、あるいはそれらを代替する形で、新しい取り組みが、いくつかの学校の研究発表会には登場している。それは、例えば、公開授業の前に、そのエッセンスや特徴を授業者がアピールする機会を設ける、分科会を構成してワークショップを繰り広げる等の営みに代表される。

学校研究の営みをオープンにするための研究発表会は、今、どのようなスタイルのものが主流なのであろうか。その多様化は、どこまで進んでいるのか。本研究プロジェクトでは、57の学校ホームページにアクセスして、2008年度に開催された研究発表会プログラムを入手し、観点別に整理して、その実践動向を明らかにした。また、新しい試みを探ってみた。分析の結果、研究発表会開催に向けた、教師たちの熱意が強く感じられた。以下、その要点を示そう。

2. 「研究発表会」開催の実践動向

（1）開催主体

研究発表会は、「学校」の実践研究を公開する機会ではあるが、小中学校が「合同」で、これを催すケースが登場している。例えば、あるケースでは、午前中に小学校と中学校がそれぞれ2コマ、1コマで授業を公開し、午後、教科・領域等の研究協議会や分科会を合同で開催している。また、別のケースでは、小中学校の児童・生徒が合同で学習する様子を公開している。

応用編として、次のようなケースにも注目したい。基本的な開催主体は単独の小学校であるが、研究発表については、卒業後に子どもたちが進学する中学校や同じ中学校区内の別の小学校の教師たちにもそれにたずさわってもらうという工夫である。

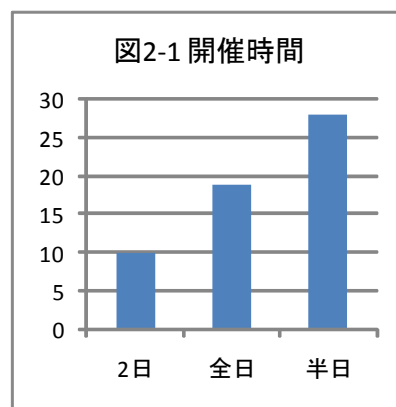
（２）開催日

ほとんどの学校は、秋または冬に、研究発表会を開催している。最も頻度が高かったのは、２月であった（１９ ケース）。それに、１１ 月が続く（１６ ケース）。１ 学期は、３ ケースが６ 月に実施していたのみであった。

一部の学校では、春と冬、秋と冬に、２度開催するというチャレンジも試みている。それぞれ、例えば、教科と総合といった、趣の異なるテーマを定めている。つまり、ただ単に研究発表会の開催回数を増やしているわけではなく、学校の取り組みの多様性を示すべく、複数の研究発表会の性格を意図的に変えている。なお、今回の分析対象には確認できなかったが、春と冬に、同じテーマで授業公開や研究発表を催す学校があった。それは、春の提案内容に即して子どもが成長している事実を、冬の研究発表会では、参加者に具体的に確認してもらうという趣旨であったと聞いた。

開催時間については、どうであろうか。図 2-1 のような結果となった。ほぼ半数を、半日開催が占める。これらはすべて、午後の開催である。逆に、研究発表会が２日にわたるケースも相当数確認されたが、これらのお大半は、国立大学法人の附属学校であった。

後述するように、開催時間が長いほど、研究発表会のプログラムに工夫を凝らしやすい。



（３）研究発表

ほぼすべてのケースで、学校の代表者が自校の取り組みをレポートする機会が設けられていた。それがなかったのは、５ ケースであった。これらの中には、分科会が設定され、その冒頭で学校全体の取り組みが紹介されるケースが含まれるので、実際には、学校の研究発表が設定されていないケースは皆無に等しい。

むしろ、その時間帯に、注目したい。研究発表会の冒頭にそれを位置づけるケース、公開授業後（研究協議会前）に催すケース、研究協議会や分科会終了後のパネルディスカッション等と連動させる形で位置づけられる（その最初に研究発表がなされる）ケースと、研究発表の時間帯は様々である。

（４）公開授業と研究協議会

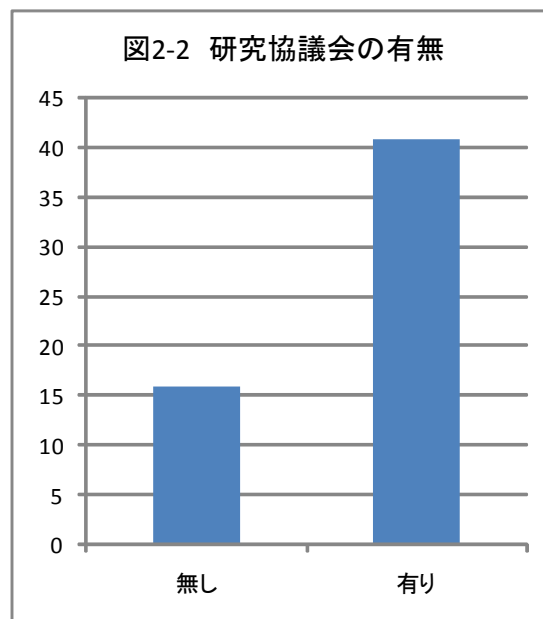
すべての研究発表会で公開授業が設定されていたが、その数にはかなりの幅がある。最も少ない場合には３つの授業の公開にとどまるが、最も多い場合には４５ を数えた。平均は約 １５，中央値は １３，標準偏差は １０ 強であった。公開授業の数は、学校の規模によってその意味が変わってくるので、数の多寡だけでその動向を語ることは難しい。けれども、それが多様性に富んでいることは、確認できよう。

また、開催時間が２日に及ぶ場合には、同じ単元の連続した授業を公開する、同じ教師が異なる教科等の指導を公開するといった枠組みが採用されている。また、ある学校は、文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」拠点校として、自校の教師による英語

活動の授業を公開するとともに、他地域の教育委員会の指導主事に「デモンストレーション授業」を実施してもらっている。

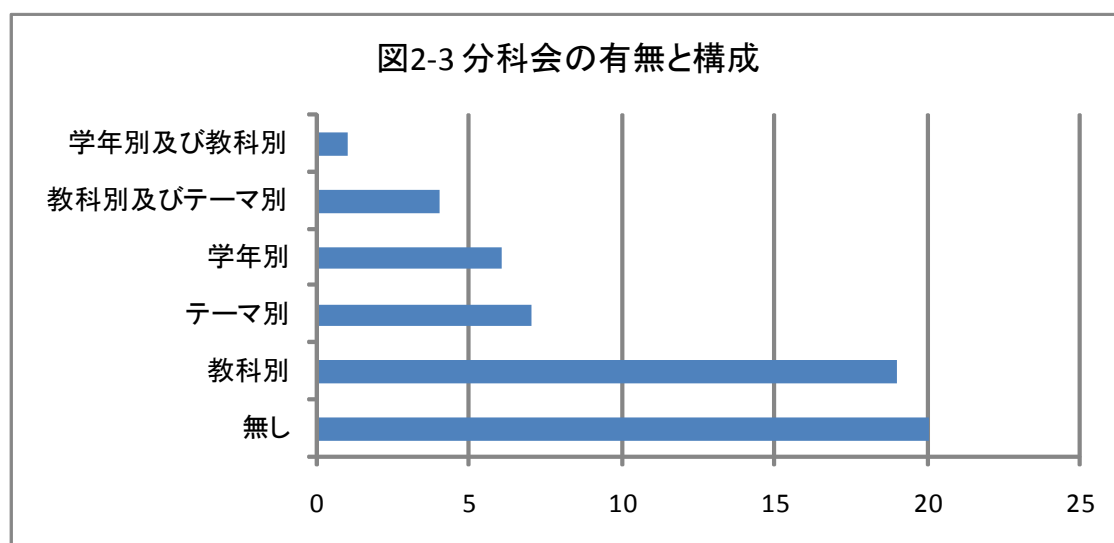
なお、授業が公開されても、それに関する協議の機会が持たれないケースも相当数確認された。図 2-2 のとおりである。

研究協議会が催されないケースの大半は、開催時間が「半日」しか用意されていない。研究発表会の開催時間は、もちろん限られている。しかし、その中で、何を優先するかに関して、再考が必要かもしれない。57 ケースのうち、協議会が「無し」でありながら、全体会の「講演」に時間を費やしているケースが少なくなかったからである。



(5) 分科会

いくつかのグループに分かれて研究交流を図る場面（以下、分科会）が研究発表会に設定されているかどうかについても、確かめてみた。図 2-3 のような結果となった。



分科会が開催されている場合、学年別、教科別、テーマ別と、その構成原理は多様であった。複数回の分科会を設定できている場合（上図の学年別及び教科別、教科別及びテーマ別のケース）も、5 ケース確認された。それらはいずれも、開催時間が2 日の場合である。

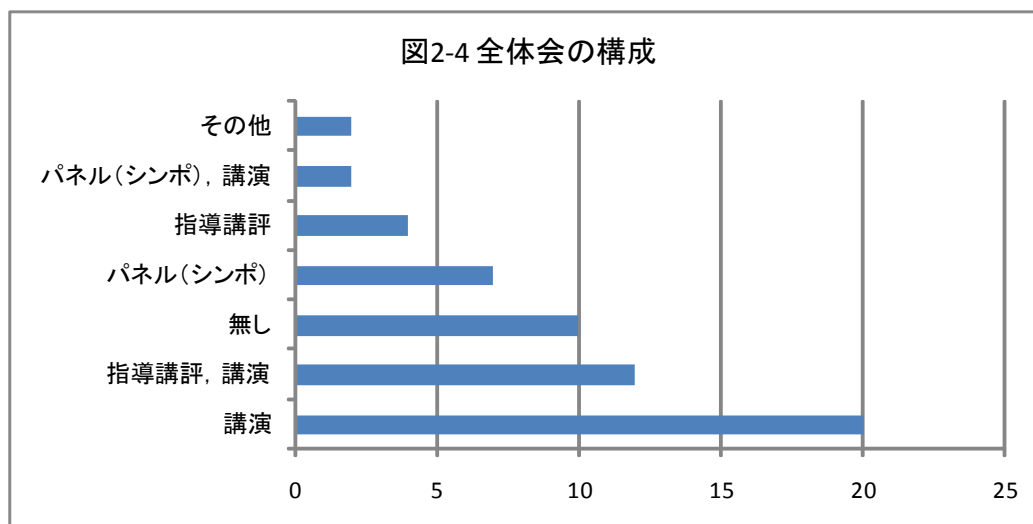
分科会の内容や活動について、注目すべき事例がいくつか見られた。例えば、ある学校の研究発表会では、5 つのテーマに基づく分科会が構成されているが、それぞれに、「指導者」「コーディネータ」「実践提案協力校」「当校提案者」が位置づけられている。分科会参加メンバーの多様な専門性によって、実践間に異同が生じる理由が多面的に検討され、整理される可能性が高められるに違いない。

テーマ別の分科会が構成される場合に、このようなデザインが採られている。例えば、ある

学校の分科会には、「幼・小・中連携のカリキュラム開発」「特別支援教育，教育相談」「すこやかな体づくり」「子どもを丸ごと育てる地域連携の在り方」という4つの分科会が設定されており，それぞれの分科会のテーマに即した講師や先進校発表者が招聘されていた。

（6）全体会（研究発表以外）

全体会（研究発表以外）の構成については，図2-4のようなタイプのものを確認できた。



全体として，「講演」が多い。指導講評とセットになったケースも含めると，半数を超える。しかし，その一方で，全体会は開催しない（分科会は開催するけれども）場合やパネルディスカッションを実施する場合など，この点にも，多様性がうかがえる。

そして，パネルディスカッション等の内容も，多岐にわたる。例えば，ある学校では，パネルディスカッションの登壇者に，ありがちなメンバー（教育委員会のスタッフ，大学研究者，当該学校職員）だけでなく，保護者，地域住民，卒業生の代表を加えている。

3. 「研究発表会」の具体的事例

57 ケースのうち，いくつかのケースについては，研究主任を務める教員に実際にある小学校の研究発表会に参加してもらい，2～3 ページで示した指標に基づいて，それを評価してもらった。その研究発表会（ICT 活用を含む，教育の情報化に関する取り組みを公開）の概要と評価結果（観点別評価，全体的な評価）を示そう。後者は，当該研究発表会の案内やプログラム等について，上述した教員に4段階で評定してもらった結果と彼が考えた改善案である。

なお，この学校は，児童・生徒数は700名弱（学級数は21）の中規模校である。同校の研究発表会は，平成21年1月に，次のようなプログラムで構成された。参加者数は，約200名であった。

- 1 2 : 3 0 受付
- 1 3 : 0 0 全体会
- 1 3 : 2 0 公開授業Ⅰ
- 1 4 : 1 5 公開授業Ⅱ

15 : 15 全体会Ⅰ：公開授業に関する協議や指導助言
16 : 20 全体会Ⅱ：パネルディスカッション
17 : 00 閉会

【観点別評価】

(4＝あてはまる, 3＝少しあてはまる, 2＝あまりあてはまらない, 1＝あてはまらない)

(1) 案内

- ①早い段階から、開催時期等が案内されていた。(4)
- ②複数の方法で、開催が案内されていた。(4)
- ③案内では、研究発表会の特長や魅力がアピールされている。(4)
- ④最終的な案内では、研究テーマや公開授業の内容が詳しく説明されている。(4)
- ⑤案内には、実践の内容や研究発表会のプログラム等を事前にたずねるための連絡先等が示されている。(4)

改善案

・案内では、個々の公開授業や全体会のポイントが示され、大変分かりやすかった。欲を言えば、案内等に、研究テーマに即した実践のねらいがもう少し具体的に示されているとよいと感じた。

(2) プログラム

- ①研究のテーマや進捗状況を踏まえて、プログラムが組まれている。(4)
- ②プログラムの各活動の時間設定や順序等が適切である。(3)
- ③研究発表会の最初にオリエンテーションを開催するなどして、参加者が研究発表会で実践情報を十分に収集できるよう配慮されている。(4)
- ④学校の研究発表に関して参加者が意見を積極的に述べるような機会と仕組みが、用意されている。(1)
- ⑤公開授業、研究協議会、全体会の内容を関連づけるための工夫がある。(4)

改善案

・2コマの公開授業に、豊富な講師陣による振り返り、パネルディスカッションと、参加者にとっては大変学びの多いプログラムであった。その分、参加者と授業者が意見を交流する時間が取れないのは、致し方ないことかもしれないが、少し物足りない気もする。公開を1コマにするか、全体会を1つにまとめるかなどして、意見交流する時間を設けることも考えられよう。

・研究発表は、コンパクトにまとめられており、これまでの研究の流れや公開授業のポイント、数値データを根拠とした成果と課題などが提示され、大変分かりやすかった。可能であれば、学校の研究テーマを実現するために、どのようなICT活用を、どのような意図で展開しようとしているのかについて、学校全体や各教科の方針とともに、プリントを配布するなどして示してもらえると、より分かりやすかったのではないかな。



写真1 当該学校の研究発表の様子

(3) 公開授業

- ①研究テーマに即した授業が公開されている（指導案にその関係が記されている）。(4)
- ②研究テーマを具体化した、多様な授業が公開されている。(4)
- ③それぞれの授業者が、授業展開や学習活動、学習環境等に工夫を凝らしている。(4)
- ④指導案の書式が工夫され、授業者のねらい等が伝わりやすい。(3)
- ⑤掲示等が工夫され、公開される授業だけでなく、その前後の授業、その他の単元の授業に関する実践情報を入手できる。(3)

改善案

・ICT活用等の工夫については、指導案の「単元観」部分の最初に記述したり、単元計画の欄にもその活用計画を書いたり、それぞれの授業者がしっかりとした意図を持ってICTを活用しようとしていることが強く感じられた。ただ、ICT活用について記述してある箇所がまちまちであった。ICT活用について、どこに何をどの程度書くのか、ある程度様式を揃えるとよいのではないかと感じた。

・本時の展開については、児童の具体的な姿（特に本時のねらいに関する部分）について記述してあると、分かりやすいのではないかと感じた。教材・他者・自分と「対話」している姿とはどのようなものか、学びの質が高まっているのはどのような姿か、など。



写真2 当該学校の公開授業の様子

(4) 研究協議会

- ①最初に、研究協議会のねらいや進行が確認されている。(4)

②プレゼンテーション，配付資料，ポスター等により，公開された授業の特徴，その背景などが説明（情報提供）されている。（ 4 ）

③公開授業についての検討，それを踏まえた発展的な問題の検討のバランスがよい。（ 4 ）

④研究協議会の参加者から積極的に意見が出てくるように，その運営や進行が工夫されている。（ 1 ）

⑤振り返りの機会が確保され，参加者が自身の授業づくりについて省察を繰り返される。（ 2 ）

改善案

・研究発表時の公開授業の紹介と，事後の各授業者によるプレゼンに重複する内容があった。事後のプレゼンを授業前に実施し，事後の振り返りは，当初の意図を実際にどの程度達成できたのか，具体的に振り返る時間にすればよかったのではないかと（事前に用意したプレゼンの説明に時間がかかり，本時の振り返りの時間が少なくなったのでは――）。

・講師が多くいるので，2ないし3つの分科会に分かれて，講師・授業者・参観者がそれぞれ，より密に意見を言い合えるような設定もできたのではないかと。

（５）その他

①全体会場や廊下等の掲示・展示を工夫して，参加者が情報やアイデアを得られる可能性を高めている。（ 3 ）

②研究紀要を多くの教職員が執筆しており，総論編の執筆内容と各学年や各教科編のそれとの分担や関連づけが図られている。（ 3 ）

③研究紀要に，研究の過程や成果に関するデータが載っている。実践上の悩みや課題も記載されている。（ 3 ）

④研究発表会後に，参加者が学校に対して質問や意見を投げかけられる仕組みが用意されている。（ 2 ）

⑤アンケートの実施等によって，研究発表会の内容や構成をていねいに評価しようとしている。（ 3 ）

改善案

・冊子に「各教科における学びの質の高まり」について解説しているページがあるが，各教科における ICT 活用のポイントについては，授業実践者がそれぞれのスタイルで執筆している。教科として共通のポイントがあるのであれば，まず教科としての方向性を述べて，それに基づいて各実践者がその単元なり授業なりの ICT 活用のポイントを述べた方がよいのではないかと考えた。

・研究発表に使っていたデータ（ICT 活用授業力，児童の ICT 活用の意識調査）とこれまでの成果，今後の課題を，冊子もしくは当日資料においても掲載してはどうか。

・全体会場に，ICT を活用した授業実践の写真が多く貼られており，様子が伝わってきた。各授業のねらいや実践後の簡単な振り返りなどの文章も合わせて示してもらえると，より伝わりやすくなるのではないかと。

【全体的な評価（全体的な感想と総合的な改善案の示唆）】

2 コマ公開，2 部構成の全体会，すばらしい講師と，参加者にとって大変学びの多い研究発表会であった。参加してみたいと思わせるだけのプログラム構成と，それをしっかりとホームページ等で PR されていた点がとても参考になった。

実際に研究発表会に参加して一番驚かされたのは，子どもたちの姿である。問題や教師の問いかけに対し，自分なりにじっくりと考え，子どもたち同士で考えを出し合いながら学習に取り組む姿に，感心させられた。これまでの授業づくりによって，自ら考え，学びを高めあう子どもたちが育っていることがよく伝わった。

どこで，だれが，どのような授業をするのかが，研究発表会の案内や当日の資料，校内案内などで分かりやすく示されており，初めて学校を訪れたものでも，とまどうことなく授業を参観することができた（評価者自身が所属する学校の研究発表会では十分には配慮できていない点であり，大変参考になった）。また，後援する企業が多いのにも，驚かされた。外部組織と連携しながら研究推進に取り組んでいるところがすばらしい。

教科の情報化，情報活用能力の育成，情報モラルの指導を含んだ，情報教育のカリキュラムが当日配布された冊子に掲載されていた。学年間，領域間の系統性，関連性が図られていて，とても分かりやすい。これを参考に，評価者自身の学校でも，情報教育カリキュラムを作成してみたいと思った。

ICT 活用が特別な営みである時代ならば，参加者がそれを「見る」「聞く」ことが研究発表会の支柱になるのかもしれないが，今後各地域，各学校において ICT 環境がさらに整備されていくことを考えると，本研究発表会でも，授業者と参加者が意見を交流したり，授業をもとにして参加者同士が議論したりするような機会を設けるべきだったのではないだろうか。

この評価者は，当該研究発表会を全体として肯定的に評価している（100 点満点の 83 点）。特に，案内，公開授業については，その特長を十二分に認めている。一方，プログラムや研究協議会の一部，とりわけ，参加者から意見を収集する機会の少なさを問題視している。そして，その原因を開催時間の短さ（半日）に求めつつ，打開策として，分科会の導入を提案している。

Ⅲ. 「研究発表会」の事例分析

ここでは、広島県三次市立三和小学校（パナソニック教育財団の平成 20 年度実践研究助成の特別研究指定校）が平成 20 年 11 月 28 日に催した研究発表会に関して、事例分析を試みる。まず、同校の研究主任に、学校の概要や研究発表会の特徴をレポートしてもらおう。次いで、それを参加者がどのように受け止めたのかをアンケート等から明らかにする。そして最後に、三和小学校が考える、成果と課題を紹介する。

1. 実践校の概要

広島県三次市立三和小学校は、広島県のほぼ中央部に位置する、児童数 145 名、教職員数 13 名の小規模校である。

本校は、平成 14 年度より、算数科における数学的な考え方の育成を目指した研究に取り組み、算数的活動の工夫、習熟度別指導、評価テストの作成などを研究してきた。その結果、問題解決の過程で数学的な考え方を発揮する児童の姿が増え、学力調査の得点も向上するなど、成果が見られた。しかし、説明文を論理的に読み取る力や、自分の考えを論理的に表現する力が十分には身につけていないという課題も明らかになってきた。

そこで平成 19 年度は、研究テーマを「思考力・表現力を育成する授業の創造」として、研究教科に国語科を加えた。また、思考力や表現力を育成する上で、ICT の持つ効果に着目し、ICT 活用を授業改善の視点に据え、研究に取り組むこととした。

平成 20 年度は、前年度のものを踏まえ、研究テーマを「論理的に考え表現する力を育てる授業の創造」、副題を「ICT を活用した算数科・国語科の授業改善を通して」とした。また、パナソニック教育財団の特別研究指定校として 2 年間にわたって研究助成を受けることになり、各教室にプロジェクタと実物投影機を常設し、ICT を日常的に活用できる環境を整備することができた。

研究を進めるにあたり、3 つの柱を掲げた。1 点目は「思考力・表現力を育成するための授業づくり」である。考え、表現し、伝え合うことを重視し、「ICT の効果的活用」「活動・単元構成の工夫」「個に応じた指導」「ことばの学習との関連」という 4 つの視点から授業改善に取り組む。また、思考と表現の基盤となる言葉の力を育成するために、全学年でことばの学習を行う。

2 点目は「研究の評価改善サイクルの確立」である。PDCA サイクルを基盤とする年間研究推進計画を立て、学期ごとに研究の評価・改善の機会を設ける。また、全ての授業研究会に指導講師や指導主事を招聘し、専門的な指導を受けるとともに、年間 3 回の研究発表会を実施し、他校教員から評価を得る機会を設け、研究の評価・改善を図る。

3 点目は「校内研修による研究の共有化・活性化」である。授業研究会でのワークショップ型研修や、研究部会での模擬授業等を通して、各教員の研究推進への参画度を高め、研究の活性化や研究内容の共有化を図る。

2. 研究発表会のプログラム

本校の研究発表会は、年間に3度開催されるが、秋のものは、平成20年11月28日(金)9:00～17:00に以下のようなプログラムで実施された(下記、の第2次案内参照)。当日の参加者は、176名(来賓15名・教育関係者91名・保護者70名)であった。

平成20年9月24日

広島県教育委員会教育長 様
各教育事務所長 様
各教育委員会教育長 様
各小中学校長 様
各教育関係者 様

広島県小学校教育研究会視聴覚教育部会 会長 越前 文昭
広島県小学校視聴覚教育研究大会現地実行委員会委員長 新学 雅彦
広島県三次市立三和小学校校長 曾利 晋三

平成20年度 第59回広島県小学校視聴覚教育研究大会 —三次大会 第2次案内—

初秋の候、皆様にはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。
さて、第59回広島県小学校視聴覚教育研究大会を次の通り開催いたします。皆様には、ご多用のことと存じますが、多数ご参加頂き、ご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

大会主題 『教育メディアを活用し、学習課題を主体的に受け止め、学ぶ楽しさ、豊かな感性を培う教育を進めよう』

**研究主題 「論理的に考え表現する力を育てる授業の創造」
～ICTを活用した算数科・国語科の授業改善を通して～**

◆ 期 日 **平成20年 11月28日(金)**
◆ 会 場 **三次市立三和小学校**
◆ 主 催 広島県小学校教育研究会視聴覚教育部会 三次市小学校教育研究会視聴覚教育部会
三次市立三和小学校
◆ 共 催 広島県教育委員会 三次市教育委員会 庄原市教育委員会
◆ 後 援 NHK広島放送局 広島県放送教育研究協議会 財団法人松下教育研究財団

◆ 日 程

9:00	9:30	10:00	10:10	10:55	11:15	11:30	12:10	13:10	13:30	13:40	14:40	15:00	16:30	16:40
受付	研究発表	移動・休憩	授業公開	移動・休憩	児童発表	移動・休憩	ポスターセッション	昼食・休憩	開会行事	移動・休憩	分科会授業	移動・休憩	パネルディスカッション	閉会行事

◆ 授業公開

学年	教科等	単 元	授 業 者	活用メディア
1年	算数科	ながさくらべ (IT指導)	熊野 めぐみ 定光 美鈴	実物投影機
2年	国語科	ビーバーの大作	小林 千恵	電子情報ボード 実物投影機
3年	国語科	いろいろなお祭りについて調べよう	村上 千佳子	電子情報ボード
4年	ことば	ことばでじょうずにご案内	福田 瑞恵 若狭 昭宏	学校放送番組 読み書きのツボ5・6年
5年	算数科	円周と円の面積	松山 慎二	学校放送番組 マテマティカ2
6年	算数科	割合をつかって (習熟度別指導)	植敷 光浩 愛甲 昌弘	コンピュータ

◆ 分科会提案・講評

分 科 会	提 案 者	講 評
放 送 教 育	三次市立田幸小学校 教諭 中原 倫仁	備北教育事務所 指導主事 東 直美
教 育 機 器	三次市立青河小学校 教諭 久保 眞理子	三次市教育委員会 指導主事 池田 誠
コ ン プ ュ ー タ	三次市立甲奴小学校 教諭 小川 洋	広島県教育委員会指導第一課 指導主事 住元 康男

◆ 参加費 2000円(資料代金を含む)

◆ パネルディスカッション テーマ「ICT活用の可能性を探る」

○コーディネーター
木原 俊行 先生 (大阪教育大学教育学部 教授)
(講師紹介)
主たる研究領域は授業研究や教師教育を中心とする教育工学、教育方法学。日本教育工学会、日本教育メディア学会等に所属。主な著書に、「授業研究と教師の成長」「教師が磨き合う学校研究」他多数。

○パネラー
住元 康男 先生 (広島県教委指導第一課 指導主事)
宇治橋 佑之 先生 (NHK制作局 第1制作センター専任ディレクター)
玉井 基宏 先生 (広島市立白島小学校 研究主任)
本校教員

◆ 参加申し込み(11月14日締め切り)

〒729-6702 広島県三次市三和町敷名1496番地
三次市立三和小学校(教頭 津田 武子)
(FAX)0824-52-3159 (Tel)0824-52-3158
(メール)miwa-e@city.miyoshi.hiroshima.jp
※ 会場周辺には店が少ないため、昼食は持参していただくか弁当を注文して下さい(800円お茶込)

当日のプログラムのうち、主なものを詳述しよう。

(1) 研究発表

授業公開に先立ち、本校の研究推進の構想と実践の様子についてプレゼンテーションを行うことで、参加者が研究の全体像や、授業改善の視点を把握することができるようにした。

これまでの研究の経緯や、研究の全体構想、授業改善の視点など、実践の基盤となる理論や構想を中心に説明し、実践の様子は、そのポイントのみを簡潔に述べた。

プレゼンテーション画面は、図、写真、グラフなどを使い、文章はなるべく短いキーワード

で示すようにし、参観者が理解しやすいよう工夫した。

研究発表の途中で、授業者自らが、公開授業の工夫点、ポイントについて1分程度で説明を行った（授業アピール）。参観者が、それぞれの授業者の説明を聞くことで、授業公開の全体像をつかむとともに、どの授業を参観するかを判断しやすいようにした。

（２）公開授業

公開授業が本校研究の内容全体を網羅できるよう、教科、授業内容、活用メディア、指導形態などを考慮した。以下が、その全容である。

学年	教科等	内容	主な活用メディア	指導形態
1	算数科	任意単位による長さの比較	実物投影機	TT
2	国語科	説明文の読解	電子情報ボード パソコン	一斉
3	国語科	ニュース番組づくり	ビデオカメラ 実物投影機	一斉
4	ことばの学習	わかりやすい道案内の仕方	NHK学校放送	TT
5	算数科	円の面積の求め方	NHK学校放送	一斉
6	算数科	割合を使った問題	電子情報ボード パソコン	習熟度別

（３）ポスターセッション（研究協議会）

短時間でなるべく多くの参加者から意見を得られるよう、授業後の研究協議をポスターセッション形式で行った。あらかじめ授業の展開や指導のポイントを大きなポスターにまとめ、会場内に設置した。ポスターはコンピュータで作成したものを大型印刷機で印刷し、写真や色使い、文字の大きさなど、見る人に分かりやすいよう配慮した。授業で使ったワークシートやノートも補助資料として会場に持参し、授業に即した具体的な協議ができるよう配慮した。

ポスターセッションに不慣れな参加者がいることを予想し、事前に進行役がポスターセッションの流れや方法を説明した。その際、まず参加者から質問や意見を言ってもらうこと、なるべくたくさん発言してもらうことを目指した。

ポスターセッションは、協議が活発に行われる反面、司会者や記録者がいないため、協議内容を整理したり記録したりできない。そこで、ポスター発表者にメモ用紙とバインダーを配り、協議内容を簡単にメモできるようにした。

個別に協議が行われるポスターセッションでは、参加者は、別のポスター前でどのような協議がなされたのかを知ることができない。そこで、ポスターセッション終了後、進行役が参加者の数人にポスターセッションの感想や協議内容についてインタビューを行い、全体で共有化を図った。進行役は、事前に進行表を作成し、どのタイミングで、だれに、どのような質問をするかをあらかじめ想定しておいた。その際、会場の状況によって進行の仕方を変化させることも共通理解しておいた。

（４）分科会

三次市小学校視聴覚教育研究部会によるレポート提案を行った。放送教育、教育機器、コン

ピュータの3分科会に分かれて実施した。

（５）パネルディスカッション

記念講演のように一方的に話を聞くのではなく、様々な立場のパネラーと参加者が、これからの ICT 活用の可能性について考え、意見を交流できるよう、パネルディスカッションを実施した。そのテーマは、「ICT 活用の可能性を探る」である。

大阪教育大学の木原俊行教授がコーディネーターを、県教育委員会指導主事、NHK 学校放送番組の制作者、視聴覚・放送教育に取り組む他校研究主任、本校研究主任がパネラーを務めた。登壇者だけでなく、会場の参加者からも質問、意見を出してもらい、会場全員が討議に参加できるようにした。

３．評価結果

（１）項目別評定結果

研究発表会の内容等に関する評価のために、参加者に対してアンケートへの回答を依頼した。その結果は、以下の表のとおりである。アンケートは、次の８項目に対して、４件法で答えてもらうものであった（本小冊子の最終ページに、それを一般化したものを載せているので、ご活用いただきたい）。

保護者を除く、36名の教育関係者から回答を得た。そのうちの８割は、三和小学校で授業を見学するのは初めてであった。また、６割弱は、事前に同校のホームページの研究活動部分にアクセスせずに研究発表会に参加している。

アンケートの項目	あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
１．研究大会のプログラム（研究発表、授業公開、ポスターセッション、分科会、パネル等）やその時間設定は適切だと思う。	52.8%	44.4%	2.8%	0.0%
２．研究発表を聞いて、学校の取り組みの全体像が分かった。	69.4%	30.6%	0.0%	0.0%
３．研究主題に即した授業が公開されていた。	52.8%	41.7%	5.6%	0.0%
４．それぞれの授業者が、授業展開や学習活動、学習環境等に工夫を凝らしていた。	72.2%	27.8%	0.0%	0.0%
５．ポスターセッションでは、公開授業について、授業者や参加者としっかり意見を交わした。	36.1%	38.9%	25.0%	0.0%
６．ポスターセッションでは、自分の授業づくりについて、しっかり考えた。	30.6%	55.6%	13.9%	0.0%
７．廊下等の掲示物等からも、学校の取り組みを学べた。	48.6%	48.6%	2.9%	0.0%
８．研究紀要に研究の過程や成果、悩みや課題が記されており、それを読んで、学校の取り組みがよく分かった。	52.8%	44.4%	2.8%	0.0%

（２）改善に向けた示唆

三和小学校の研究発表会への参加者のうち、４名の教師（A, H, M, T）に、案内、プログラム、公開授業、研究協議会、その他という５つの観点から、改善策を検討してもらった。彼らは過去ないしは現在、所属校で研究主任を務めた経験を持つ、中堅ないしはベテラン教師であり、他校の研究発表会を評価する鑑識眼を有している。彼らが示した、改善のポイントは、以下のとおりである。

①案内

- ・メールで参加を申し込んだが、受け付けたかどうかの確認メールがなかった。（A）
- ・分科会の内容が全く分からないので、申し込みにくい。（A）（T）（H）
- ・ポスターセッションの意図を明確にする方がよい。（H）（M）
- ・最終案内の研究会のお知らせにある「実践事例」の頁について、プレ研究発表会の内容はあったが、これまでの事例も載せてあるとなおよい。（T）
- ・広島県の視聴覚研究会のホームページを案内に載せるべきであった。（A）

②プログラム

- ・三和小学校の実践がしっかりとしているものだけに、広島県視聴覚教育部会としての提案を三和小学校の研究と絡ませながらする必要があったと感じた。（T）（A）
- ・ポスターセッションの意図を明確に記載した文書を、配付資料の中に入れるべき。（H）
- ・ポスターセッションでは、学校研究の様子を説明するボードが用意されていたが、ここは研究主任が説明する方がよいと思う。（M）
- ・開会行事であるが、研究目的で参加している者には、儀式としての形式が色濃いという印象を持った。１日のプログラムの流れからいうと、開会行事という名のとおり、朝一番の研究発表の前に持ってくるとよいのでは。（H）
- ・小学校視聴覚教育研究大会となっている手前上、開会行事は外せないのかもしれないが、時間的に長いので、短くしたい。（M）

③公開授業

- ・全部が研究テーマに即した授業だったとは言えない。「表現力」としての成果は、充分達成されたと考えるが、「思考力」という部分では、まだ達成されていない。（M）
- ・算数でのレディネステストは掲載されているが、国語はどのように評価したのか客観的な評価が見えない。どのように測ったのかを明確にするとよいと思う。（T）
- ・評価規準や判断基準は適切であるかの検討。他の学年でも同じような疑問を持つところがあった。（T）（A）
- ・実践のポイントや ICT 活用の意図などがあって、研究テーマに即した授業及び指導案の作成になっていると思う。しかしながら、それが、指導案を読み込んでいかないと分かりにくい。指導案の頭の部分にどのような ICT 活用を行うか、本時のポイントなどの明記があると参加

者に分かりやすいと思う。(T)

- ・公開授業の中でも3年生が取り組んでいたように、児童自身のICT活用に取り組んでいけるとよいと思う。「ことばの教育」の年間カリキュラムのように、児童のICT活用のカリキュラムも今後作成されるとよいと思う。(T)
- ・評価規準や判断基準を見直す必要があると思う。そこを見直すことでICTの活用や子どもへの手だて、ワークシートやノートへの記入に変化が現れるのではないだろうか。(A)
- ・公開授業を参観し、研究主任がパネルディスカッションで「ICTが授業の中に溶け込めば、大事な部分が見えてくる」と発言されていたことを思い起こすと、学習のそして本時のねらいをどこにおくか、何を重視するか、教材文をどう読むかなどについて、授業改善を今後も行っていってほしいと感じた。(T)

④研究協議会

- ・授業者によるアピールタイムがあったのだから、全てではなくても授業者自身の授業を終えて、さらにはポスター発表を終えてのコメントがあるとよかったと思う。(T) (M) (A)
- ・ポスターセッションでのやりとりやパネルディスカッションを通して、参加者同士でICT活用や放送について考え合う場がもう少しほしかった。今回の分科会の時間設定では難しいかもしれない。(T)
- ・ポスターセッションの説明はされていたが、ねらいの提示は曖昧だった。一部の熱心な参加者が授業者と熱く議論を交わしている場面があったが、一言も話していない参加者もいた。参加者にポスターに関するワークシート等を用意して、すべてのポスターを回る工夫を取り入れれば、授業者にもっと還元できたと思う。(A) (H) (M)
- ・参加者の意見を授業改善に役立てるという発想は大変よいが、一人ひとりの意見を吸い上げる手法としては、ワークショップ型の協議会が適している。今回のポスターセッションでは、話し合いに参加していない人を目にしたので残念だった。これは付箋を使ったワークショップ型の事後研修会では、全員の意見が残ることになるので、こちらの手法での分科会運営を今後期待したい。(H)
- ・分科会提案をもう少し詳細に載せるべきか、無理であるならば、参加者全員に配布すべきであると思う。大会運営と研究校との連絡・連携は大変であると思うが望みたい。(T)
- ・午後の分科会提案について。午前中のトーンとは、急に違うものになってしまった気がした。この分科会における提案もテーマに合わせてポスターセッション形式にしたら、もっと熱いものがあったのかもしれない。(M) (H)

⑤その他

- ・成果と課題について、児童と教員とに分けて書くなど見やすくするとよいと思う。例えば算数の課題に挙げている最後の項目「思考力・表現力～」はこれまで吟味してきたことと思う。単元や発達段階など様々な要素があると思うが、今どのようなことが課題なのかを整理するとよいと思う。(T)
- ・研究紀要には、第59回広島県小学校視聴覚教育研究大会の大会主題と三和小学校の研究主題

との関連を説明する記述がほしい。視聴覚教育研究大会の意義をどのように捉えて、三和小学校が実践・検証しようとしているのか、その繋がりが不明確であった。そのことは、分科会の運営にも表れている。放送機器・教育機器・コンピュータが三和小学校の研究のどの部分とリンクしているのか、少しでもよいので記述があると大会主題と研究主題の関連が明確になると思う。(H)

- ・学校教育目標と研究主題との関連である。研究紀要3ページに、学校経営全体計画がある。ここには、「学校の使命」(ミッション)や「学校像」(ビジョン)が示されており、管理職が上手くマネジメントされている様子が伝わってくる。また、ミッションやビジョンは職員室にも大きく掲示され、各職員に周知徹底されている。しかし、今回の研究紀要からは学校教育目標と研究主題の関連が読み取れなかったもので、改善を望みたい。(H)
- ・研究の仮説が書かれていない。これは研究の見通しがいいことになる。手だて「こうすれば」→目指す姿「こうなるだろう」の関係を、筋道立てて書いていただきたい。(H)

4. 成果と課題

(1) 案内

県内小学校には文書による案内を7月と9月に出した。また同じ文書を本校ホームページにも掲載し、広く情報を発信できた。

課題としては、もっと積極的な情報発信が必要であったことが挙げられる。例えば研究会情報を紹介しているサイトに掲載してもらうよう依頼したり、他校ホームページと相互リンクを貼るなどして、本校ホームページを訪問しようと思っていない人の目にも留まる工夫をすべきであった。また、メールでの参加申し込みに対し、参加を受け付けた旨を返信すべきであった。

(2) プログラム

研究発表は、「授業を参観する前に、本校研究の概要がつかめた。」「児童実態をグラフで表すなど、分かりやすい工夫があった。」などの評価を得ることができた。また研究発表の途中で行った授業アピールについても、全員で研究に取り組む姿勢を伝えられた。

今回は時間の都合上難しかったが、ポスターセッションに入る前に、授業者が簡単に振り返りを述べたり、ポスターセッション後に意見交流の場を設けたりするなどして、全体で共有する時間を設定できればよかった。

開会行事、分科会提案は、県の視聴覚教育研究大会との関連で行ったものだが、本校研究会と県の研究大会との関連性を明確に示していなかったため、参加者にとっても分かりにくさを感じる面があったことを反省している。

研究発表で本校研究の構想を説明し、公開授業で実践を提案、ポスターセッションで実践の成果と課題を協議し、パネルディスカッションで本校の取り組みをもとにこれからのICT活用について考察する、というように、相互の関連性が明確なプログラムをデザインできた。

(3) 公開授業

参加者によるアンケートの回答では、ICT 活用のよさを感じ、自分も活用してみたいという意見がかなり多く寄せられ、ICT を効果的に活用した授業を提案できたと考えられる。また、掲示物や発表の仕方、思考を表現し伝え合うという授業スタイルなど、ICT 活用以外の部分についても、肯定的な評価を得た。

課題としては、授業でねらう論理的な思考力・表現力と ICT 活用の効果をいっそう関連させること、評価規準、判断基準をさらに具体的に、また適切に設定すること、ICT 以前の授業デザインをしっかりと練ること、などが挙げられる。

（４）研究協議会

ポスターセッションは、参加者と授業者の距離感を無くし、密度の濃い意見交流ができたことで、参加者、授業者ともにその効果を実感できた。ポスターを準備することで、授業に即した具体的な協議ができた。

ただし、アンケートの回答等にも明らかなように、会場には積極的に協議に参加していない人も見られた。ポスターセッションに関する事前説明をもっと丁寧に行ったり、説明文書を配布したりして、協議の仕方やねらいを理解してもらう必要があった。参加者になるべく多くのポスターを回り、意見を言えるよう、ワークシートを用意するなど、具体的な手だても必要だった。研究構想図のポスターには説明者がおらず、研究推進に関する意見交流ができなかった。研究主任が時間を決めてポスター前に立つなどの工夫が必要であった。

分科会提案は、「他校での取り組みが学べ、参考になった。」「学校放送制作者の意見が聞けて興味深かった。」などの評価を得られた。しかし、分科会提案と本校研究との関連が不明瞭であったり、事前の案内文書に分科会提案の内容が記載されていなかったりなど、参加者にとっては分かりにくい面もあった。分科会提案者もポスターセッションで発表すればよいのではないかという意見があったので、今後、その実現可能性を検討していきたい。

パネルディスカッションは、指導講師のコーディネートによって、各パネラーや参加者から出された多様な意見から、これからの ICT 活用の可能性やポイントについて会場全員が考えることができる時間となった。なお、プロジェクタや暖房器具など、会場設備のアクシデントがあり、事前の準備不足が課題であった。

（５）その他

研究大会当日に配布した研究紀要、リーフレットが好評だった。全員が執筆・製本に携わり作り上げた成果である。

研究大会そのものも、全職員で作りに上げたものである。会場設営、配布物、授業提案、準備や片付けなど、全職員の力を合わせなければできなかったことばかりである。

IV. 「研究発表会」の開催に向けたアクション

本章では、前章で研究発表会の事例分析の対象に据えた三和小学校の教師たちが、学校長や研究主任のリーダーシップの下、どのようにして研究発表会の企画・運営を進めていったのか、またそれが終了した後どのような研究活動を重ねていったのかを示す。つまり、学校研究の年間スケジュールに、研究発表会の開催がどのように位置づくのか、それにはどのようなアクションが必要だったのかを、同校の研究主任にレポートしてもらおう。また、その成果と課題を省察してもらおう。

これらの記録等は、研究発表会を開催する学校のリーダーにとって、よき道標となろう。

1. 研究発表会開催のねらい

研究発表会を開催する大きな目的は、研究を公開することによって外部評価を得ることである。外部評価を得るメリットは主に次の3点である。1点目は客観的評価を得ることである。自己評価では客観性に乏しい。外部参加者から客観的に意見を出してもらうことで、自校の取組みについて客観的な評価を得ることができる。2点目は専門的評価を得ることである。その分野について研究に取り組んでいる大学研究者、教育委員会スタッフ、学校や研究組織の教員から、専門的な知見に基づく評価を受けることで、研究をより高めることができる。3点目は、モチベーションを高めることである。授業公開はいい意味で緊張感をもたらす、学校研究へのモチベーションを高める効果がある。厳しい評価に発奮したり、がんばりを認めてもらうことで自信につながったりと、多様な効果が期待される。

平成20年度、本校では11月の研究発表会に加えて、9月にプレ研究発表会、2月に研究推進リーダー研修会が催された。つまり、計3回、学校外の実関係者に授業等をオープンにし、研究発表をおこなう、「研究発表会」が実施された。これら3回の研究発表会は、その目的や位置付けに応じて、公開の規模や研究協議会の方法などを意図的に変えている。

9月のプレ研究発表会は、その名が示すように、11月の研究発表会の準備・練習を主な目的としている。そのため、視聴覚教育を実践している他校研究主任や地域の視聴覚研究部会の教員に参加してもらい、専門的な立場から評価を受け、研究の方向性や授業の改善点を明確にできるようにした。また、研究協議会ではポスターセッションを行い、ポスター作成のコツ、協議の雰囲気や進め方などを経験できるようにした。

11月の研究発表会は、本校の取組みを広く世に発信すること、そしてなるべく多くの人に参加してもらい、多様な意見を得ることを目的としている。そのため、公開授業前の研究発表、授業アピール、授業後のポスターセッション、パネルディスカッションと、意見交流が活性化するようにプログラムを工夫した。さらに参加者アンケートを実施し、評価を数値化して客観的データを得たり、研究協議会では拾いきれない声を集めたりするようにした。

2月の研究推進リーダー研修会には2つの大きなねらいがある。1つは、市内小学校への研究の普及や相互交流を促すことである。そのために、本校の研究推進の取組みを紹介したり、各校の1年間の研究活動を交流し、次年度に向けた改善の視点を探ったりするためのワークシ

ヨップを実施した。もう1つのねらいは、研究の継続と共有化を図ることである。3学期に研究発表会を設けることで、11月の研究発表会以降も研究を継続させることを強く意識づけることができる。さらに2月の研究推進リーダー研修会では、研究部会が、教科を交換して授業提案を行う。他方の研究部会の取組みを把握し実践することで、研究の共有化が促されるからだ。

2. 研究発表会開催に向けてのアクション

(1) 4月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
4.7-13	企画委員会の開催	昨年度末に作成した研究推進計画を提案し、新体制でスタートするにあたって、変更が必要な箇所について協議した。	研究全体会までに、研究の方向性や構想について企画委員会で共通理解を図ることができた。	
	研究全体会の開催	今年度の研究推進計画についてプレゼンを行った。特に11月の研究発表会までの計画(授業研究会の日程や指導案、研究紀要作成時期等)については、時間をかけて説明した。	これまでの研究の歩みと、今年度研究の方向性、見通しについて、図やグラフ、年次計画表などを提示しながら説明することで、理解を深めることができた。	研究主題や研究組織について協議する時間を十分には取れず、一方的に説明する時間が長くなってしまった。
4.14-20	授業研究会の開催	全員で研究の具体的イメージを共有するために、研究主任が授業提案を行った。	新メンバーに研究の具体的イメージを持ってもらうことができた。	時間の制約上、研究協議会をもつことができなかった。
	指導講師との協議	<u>指導講師と、研究発表会の内容や時間設定、司会者選定の視点について協議し、アドバイスを受けた。</u>	この時期に研究発表会の大まかな内容を定めることで、その企画や準備に十分時間をかけることが可能となった。	協議には管理職と研究主任だけが参加したが、研究推進委員の教員も参加する体制を整えられればよかった。
	企画委員会の開催	<u>研究発表会のプログラム原案を作成し、管理職・教務主任とその内容について協議した。</u>	指導講師のアドバイスに基づき、参加者の意見を多く得られるようプログラムを工夫できた。	
4.21-27	市視聴覚教育研究部会の開催	<u>市視聴覚教育研究部会で、本校研究発表会のプログラム、特に研究協議会や分科会の持ち方等について詳しく説明した。</u>	司会運営を担当する他校教員に、早い段階から研究発表会の内容や意図を理解してもらうことができた。	組織発足前に部会を開いたため参加できた部員が少なかった。新体制が確立してから改めて説明する必要がある。
	研究推進委員会の開催	研究部会長と、研究部会活動の方向性について確認し、5月の授業研究会に向けて取り組むよう依頼した。	昨年度の反省を生かし、年度当初から部会活動の方向性について連携できた。	
	学校ホームページの作成・発信	研究推進に関する情報を広く発信できるよう、学校ホームページを作成した。 <u>研究発表会の日時を掲載し、参加を呼びかけた。</u>	研究推進について詳しく情報発信できるよう構成を工夫した。研究発表会の日時を早い時期から公表できた。	今後は作成を分担し多くの職員が関わるようにしたい。

4.28-5.3	研究部会の開催(指導案検討)	研究の方向性が見えるような授業提案となるよう、指導案を十分検討するよう依頼した。	授業提案は研究部会全員で取り組むという体制を、今年度も継続することができた。	
	研究全体会の開催(指導案検討)	指導案検討会の司会を務めた。指導案の様式や、記述の仕方についても説明した。	研究のテーマや視点、指導案の様式や記述の仕方などを確認できた。全員が発言できるよう、意図的に指名した。	口頭での説明では不十分なため、指導案の様式や記述の仕方を文書にまとめ、配布したい。
	授業研究会の開催	国語科の説明文学習の授業を、国語科部会長に提案してもらった。	説明的文章学習における本校の基本的スタイルを、全員が確認できた。	研修の計画上、研究協議会を持つ時間を設定できなかった。次回の授業研究会の初めに感想を交流することとした。

4月のアクションでは、研究発表会のプログラムをこの時期にほぼ決めたことがポイントである。研究発表会に向けて、見通しをもって早い時期から準備にあたることができた。

(2) 5月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
5.4-10	授業研究会の準備	指導講師に研究協議会のねらいや内容、時間配分、指導を受けたい事項等の連絡を行った。	授業研究会のねらいに沿って、授業提案、事後協議、講師の指導を一体化できた。	指導案送付が遅くなってしまった。
		授業提案者から授業の構想や機器の準備等について相談を受け、サポートした。	研究テーマに沿った授業提案になるよう、活動やワークシートの工夫などをアドバイスできた。	研究部会の協議と、研究主任によるアドバイスが違ったため、授業者が板挟みになってしまった。
	研究推進委員会の開催	<u>11月の研究発表会を見通した、校内授業研究会の実施計画書を作成し、研究推進委員会のメンバーに提案した。</u>	授業研究会の計画を立てることで、各授業研究会のねらいや位置づけを明確にできた。	校内研修計画とともに、年度当初に作成しておけばよかった。
5.11-17	授業研究会の開催	授業参観の手引を作成し、研究の視点を持って授業を参観することや、授業参観時の位置取りやマナーなどを説明した。	これまで後ろで参観していた教員が、積極的に横位置に移動し、授業者と児童の両方を意識して参観していた。	
		協議会では付箋紙を使ったワークショップを実施した。また、研究協議会の最後に、振り返りタイムを設けた。	教務主任に司会を依頼した。司会の進め方マニュアルを作成して渡し、協議が充実できるようサポートできた。	協議会準備にかかる時間が無く、場の設定や司会のサポートなどが十分とはいえなかった。
5.18-24	研究発表会分科会の準備	<u>研究発表会でパネラーを依頼する予定の他校教員と連絡を取り、6月、9月の授業研究会にも参加してもらうよう依頼した。</u>	研究発表会までに、本校の研究について知ってもらえる機会を設けることができた。	

	研究部会の開催(指導案検討)	6月に実施する授業研究会の指導案検討について、研究部会長と協議し、授業提案のポイントを確認した。	前回の授業研究会で協議された点を確認し、それを6月の授業研究会につなげるようにした。	運動会の開催が迫っており、研究部会を開く時間を取れなかった。
5.25-31	学校ホームページの更新	5月に実施した校内授業研究会について、協議会の様子や工夫についてまとめ、ホームページで公開した。	本校での取り組みを広く公開し、外部からの評価を受けやすいようにできた。	今回は研究主任が作成したが、次回は研究推進委員会のメンバーと分担していきたい。

1年間の授業研究会のねらいや授業提案のポイントを含めた計画を立て、文書にして配布したことにより、授業研究会で得た成果や明らかになった課題を次の実践や授業研究会に生かしていく意識を高めることができた。

(2) 6月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
6.1-7	企画委員会の開催	6月13日に行われる授業研究会の日程や協議会の形式等について提案し、協議会のねらいや役割分担について理解してもらった。	グループ協議の司会、記録などを分担し、いろいろな教員が主体的に参加できるよう計画できた。	今回は外部講師も多く参加し、時間的・内容的にかなり詰め込んだプログラムになった。
	校内授業研究会の準備	研究協議会の内容や進め方を職員に提案した。また、当日参加する他校教員にも、日程や協議会のプログラムについて連絡した。	協議会のねらいや進め方を事前に理解してもらうことで、協議会をスムーズに進めることができた。	
6.8-14	校内授業研究会の準備	協議会進行のポイントをまとめたプリントを、研究協議会で司会を担当する教員に提示し、協議の進め方やポイント等を確認した。	グループ協議の進め方について協議し、改善策を考えることができた。協議会における司会の役割の重要性を認識してもらうことができた。	十分な時間を確保できなかった。夏期休業中に研究推進部で参加型協議会に関する研修を実施したい。
	校内授業研究会の実施	<u>研究発表会で指導・助言してもらった指導主事や、パネラーとして参加する他校教員を招き、研究発表会までに本校での取り組みを直接見てもらった機会をもった。</u>	外部講師に、本校の取り組みを知ってもらうことができた。またグループ協議や事後の指導等で貴重なアドバイスを多く得ることができた。	外部講師が多数参加することになり、プログラムの工夫をしたものの、指導していただく時間を十分には確保できなかった。
6.15-21	研究全体会の開催	<u>研究発表会における公開授業について、活用機器や分科会の割り振りを行った。</u>	早い段階から公開授業の内容や活用機器について、校内で調整することができた。	授業内容はまだ十分固まっておらず、部会長や各授業者と連携しながら早めに準備したい。
		<u>研究発表会までの取り組み(ポスター作成、指導案作成、9月のプレ研究発表会にむけた準備)についての計画を作成し職員に提案した。</u>	今後の取り組みの大まかな見通しを持ってもらうことができた。	研究紀要やポスターの内容を具体的に提案ができていないので、早めに提案できるように準備していきたい。

	研究部会の開催	研究部会ごとに1学期の授業研究会のまとめをもらい、今後の方向性や1学期に実施すべき活動について協議してもらった。	1学期の授業研究会がほぼ終わり、よいタイミングで研究部会を開催することができた。	授業研究会の準備以外の部会活動が滞っており、部長と今後もしっかりと連携していかなければならない。
6.22-30	校内授業研究会のまとめ	研究推進便りを配布し、 <u>研究発表会に向けた夏季休業中の取り組み、2学期授業研究会の予定などを再確認した。</u>	これまでの授業研究会の成果や課題を整理し、職員に確認してもらうことができた。	作成・配布が予定より遅れてしまった。
	9月の授業研究会にむけた準備	<u>ブレ研究発表会の案内を作成し、研究推進部会、企画委員会に提案した。指導講師と協議会の内容について相談した。</u>	研究発表会でも実施するポスターセッションをブレ大会でも行うようにし、事前の準備・練習ができるようにした。	

6月の授業研究会に、同じく視聴覚・放送教育に取り組む他校研究主任を招聘できた。彼には11月の研究発表会のパネルディスカッションに参加してもらうので、早い時期から本校の取り組みについて知ってもらうことができたのが大きな成果であった。

(4) 7月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に特に関連するものに下線)	成果	課題
7.1-7	校内授業研究会の実施	算数科・国語科の研究で取り組んでいるICTや学校放送番組を、道徳の授業で活用した実践を提案した。	若手教員が協議の進行を務めたが、事前準備が功を奏し、活発な協議ができた。	
	学校ホームページによる情報発信	6月の授業研究会の成果や課題を整理し、学校ホームページに掲載した。 <u>研究発表会の1次案内をそこでも見られるようにした。</u>	早い時期に研究発表会の概要について発信できた。	ホームページ更新が遅れがちなので、早く対応したい。指導案を掲載する予定にしているが、まだできていない。
7.8-14	研究発表会第2次案内の作成	<u>9月中旬に県内に配布する研究発表会の第2次案内を作成し、内容について管理職と協議した。</u>	写真を多数使う、プログラムの特徴が伝わるようにコメントを入れるなど、工夫した。	読み手をひきつけるキャッチコピーを入れるなど、さらに改善したい。
	研究推進委員会の開催	各研究部会長に、1学期の部会活動のまとめと2学期の計画の見直しをするよう依頼した。また、7・8・9月の研修計画の見直しを提案し、協議した。	外国語活動の研修などが新たに加わったため、夏季休業中の研修の内容・日程を見直し、対応した。	指定研修も多く、全員が集まる日がなかなか取れなかった。年度当初から余裕を持った計画を立てるべきだった。
7.15-21	児童実態調査の実施と分析	学期末に実施する児童意識調査の項目について管理職と協議した。また、市が実施した学力調査の学習意欲や態度に関する項目を分析し、グラフ化した。	研究で取り組んでいるICT活用や習熟度別指導に関する児童の意識を把握することができた。学習意欲や態度の向上が見られた。	児童意識調査の項目を検討する時間が十分とれなかった。質問文の表現の仕方などを今後見直していきたい。

7.22-31	校外研修セミナーへの参加	「NHK 先生のための教え方教室」への参加を校内でよびかけ、8名が参加した。	学校放送活用の視点やポイントを確認でき、よい研修となった。	研修で学んだことをまとめ、8月中旬に研究推進便りとして発行する。
	研究全体会の開催	研究で目指す子ども像のイメージを共有化・具体化し、これまでの研究のポイントを確認するためのワークショップを実施した。	国語科・算数科で育てたい思考力・表現力と、そのための手だてについて全員で確認ができた。時間をかけてじっくりと協議できた。	1学期の早い時期にこのような研修を設定できればよかった。

文書とホームページによって研究発表会の案内を発信できた。早く予定を知らせること、複数のメディアを使うことで、参加者を増やす可能性を高められた。

(5) 8月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
8.1-7	研究部会の開催(合同研究発表会の準備)	発表内容を研究の概要、算数科、国語科の3つにわけ、算数科、国語科の部分は研究部会でプレゼン資料、ポスターの作成をするよう分担した。	部会で発表準備を行うことで、全員が何らかの形で研究発表に関わることができた。特に、発表を担当した若手教員にとってよい機会となった。	各部会で作成したものを一つにまとめる作業に時間がかかった。分担する際はいつも以上に時間を多く見ておく必要があった。
	視聴覚研究大会現地実行委員会の開催	<u>研究発表会の分科会における運営委員、司会者の仕事内容について説明を行った。その後、分科会提案者と、発表内容について簡単に打ち合わせを行った。</u>	分科会発表者との打ち合わせで、発表の概要を知ることができた。後日視聴覚部会を開催し、レポート内容を検討することとなった。	本校の研究と、分科会提案レポートとの関連性について整理しておかなければならない。
8.8-14	教育事務所管内合同研究発表会への参加	ICTを活用した本校の研究の特徴を出すために、電子情報ボードを使った研究発表を行った。	研究主任、研究部会長、若手教員と、複数で発表することで、一体感を出せた。	発表直前まで準備していた。早めに取り組むよう意識していたが、日程を調整できなかった。
8.17-23	研究全体会の開催(ポスターの作成)	<u>ポスターセッションで使うポスターの例を文書で提案した。</u>	写真の配置、文字の大きさなど、参加者の目を引く工夫についてアドバイスをすることができた。	まだポスターが完成していないので、今後日程を調整しながら早めに完成するようにしていきたい。
	企画委員会の開催	<u>研究発表会で配布する研究紀要骨子・執筆担当表を作成し提案した。</u>	各教科の実践部分は研究部会で原稿の作成を担当してもらい、全員が何らかの形で紀要原稿作成に携われるようにした。	研究部会担当部分については、途中段階で早めに内容を確認していきたい(昨年度の反省から)。
	研究全体会の開催(研究発表会授業構想について)	<u>研究発表会の授業構想について、協議を行った。授業者には、構想案をプロジェクタで投影しながら、5分程度で構想を発表してもらった。</u>	早い時期に授業構想を協議できた。また、研究発表会では授業者が1分間で授業アピールを行うことにしており、その練習も兼ねることができた。	本校研究の全体像を把握してもらえるような授業提案になるよう、今後も各授業者と連携しなければならない。

8.24-31	プレ研究発表会に向けた準備	<u>9月11日に実施するプレ研究発表会に向けて、講師、指導主事に資料を送付した。また、当日の日程・準備の詳細を計画した。</u>	短い時間の中でポスターセッション、指導・助言、講演を行うために、時間配分や会場設定などの工夫を考え、提案することができた。	外部からの参加者数に応じて、ポスターセッションの方法にいくつかのパターンを想定しておかなければならない。
	研究推進部会の開催（研究発表会にむけた準備について）	<u>研究発表会に向けた準備日程、指導案様式を作成し、提案した。また、9月11日のプレ研究発表会の日程・準備の提案も行った。</u>	指導案や研究紀要の作成日程を詰めた。指導案の様式をより分かりやすいものに変更することにした。	

夏休みの段階で研究発表会の授業構想について協議できたことが成果であった。ただ、9月のプレ研究発表会の指導案検討と時期が重なり、9月の授業提案者にとってはハードであった。

（6）9月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
9.1-5	プレ研究発表会の準備 (ポスター作成)	<u>パネルの手配、共通タイトルの作成、ポスター作成と、作業を分担し、全員が協力して準備にあたるよう計画した。</u>	役割を分担することで、効率よく仕事が進み、各教員の研究への参画度を高めることもできた。	ポスターセッションの経験の無い教員がほとんどだったため、練習する時間を取ればよかったが、できなかった。
	研究全体会の開催	実物投影機の実技研修を実施した。メモリー機能の使い方と簡単な実践例を紹介した後、各自に実際に操作してもらった。	短い時間ではあったが、実物投影機の新たな機能を紹介できた。応用がききそうだという感想を得ることができた。	
9.8-12	研究推進部会の開催 (プレ研究発表会の準備)	<u>ポスターセッションの進行を担当者と協議し、ポスターセッションの流れを進行表に整理した。</u>	司会進行上の留意点を確認できた。状況に応じた複線的な進行案を作成できた。	研究推進部会全員で協議できればよかったが、時間を確保できなかった。
	研究全体会 (プレ研究発表会の準備)	<u>全体会場の準備を全員で行った。協議会のプログラムを確認し、各自の動きや時間配分などを再確認した。</u>	実際の会場で打ち合わせることで具体的なイメージをもつことができ、細かな点を確認しあうことができた。	授業者は、教室掲示や授業準備などで忙しい中で、会場準備にあたった。計画の遅れが負担を増加させてしまった。
	プレ研究発表会の開催	<u>全体進行、写真記録などの役割を分担し、研究主任以外の教員が活躍する場を設定した。</u>	事前の打ち合わせで、複線的な進行案を準備していたため、進行役の教員が、状況に応じて進行できた。	外部からの参加者が予想より若干少なかった。個人的に参加を依頼するなど、細かな手だてが必要であった。
9.15-19	研究全体会 (プレ研究発表会の反省)	<u>プレ研究発表会の成果と課題について整理し配布した。授業者に研究授業の成果と課題をレポートしてもらうよう依頼した。</u>	ポスターセッションのよさを確認できた。講師の講評や分科会の協議を整理して掲載し、実践につなげるようにした。	研究紀要の原稿作成が遅れていたため、授業者にとっては授業のまとめと原稿作成が重なってしまった。

	県外研修の計画	県外視察の計画を立てるにあたり、インターネットや書籍、指導講師から、本校研究の参考となる学校について、情報をリサーチした。	本校の研究テーマに近い学校の情報を得ることができ、その学校の研究発表会に参加するよう計画できた。	もっと早い時期に視察して、今年度の研究に多く活かせるよう計画できればよかった。
9.23-27	研究全体会（研究紀要原稿の確認）	<u>算数部会、国語部会それぞれで作成した原稿を交換し、内容の確認、校正を行った。</u>	校正することで、他方の研究部会の取組みを確認でき、研究内容の共有化につながった。	かなり修正点が出たため、修正作業と指導案作成を並行して行わなければならなかった。
	学校ホームページの更新	<u>先日のプレ研究発表会の様子や、成果と課題をまとめたページを作成し、研究発表会の第2次案内とともにホームページに掲載した。</u>	校内で配布した研究推進便りをもとに作成したため、効率的に作業を進められた。	文字が多く読みづらいので、もう少しシンプルにして、読み手に分かりやすいものにしていきたい。

プレ研究発表会を開催し、ICT 活用について多くの意見を得ることができ、研究発表会に向けた改善の視点をもつことができた。

（7）10月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
10.1-5	研究部会の開催(研究発表会指導案の協議)	<u>研究部会で、研究発表会指導案について協議した。指導案検討の視点や留意点を文書にして配布した。</u>	グループに分かれ、協議の視点を提案したことで、焦点化した協議ができた。	
10.6-12	企画委員会の開催	<u>研究紀要リーフレット版の下書きを作成し、内容を学校長と協議した。</u>	学校長のアドバイスにより、ICT 活用をさらに前面に出すようにした。	リーフレット作成の視点を変更したため大幅な編集が必要になった。
	研究発表会に向けた準備計画の見直し	<u>教務主任等と相談し、紀要原稿や指導案作成の遅れを考慮して、9月に提案した準備計画を見直し、職員に提案した。</u>	提出物の締切日を遅らせた分、他の研修内容を入れ替えたりして、発表会前にゆとりができるよう計画を修正できた。	研究紀要原稿の修正作業と指導案作成を並行して行わなければならなかった。
10.13-19	講師との協議(研究発表会指導案について)	<u>研究発表会の学習指導案について、指導講師からアドバイスを受けた。</u>	早い段階で講師からアドバイスを受け、授業構想をよりよいものに練り直すことができた。	直接、各授業者がアドバイスを受けられるよう年度当初から計画しておけばよかった。
	研究全体会の開催(研究発表会指導案の修正)	<u>講師からのアドバイスを研究推進便りとして配布した。各授業者と個別に話し合い、アドバイスされた事項について伝達した。</u>	他の指導案に対するアドバイスを知ることができ、指導内容を共有できた。	
10.20-26	研究推進部会の開催	<u>教務主任等と相談し、研究発表会に向けた研修や作業日程の見直しを再度行った。</u>	計画の遅れがあつたが、作業日程の目処が立った。	

10.27-31	研究全体会の開催(研究発表指導案の協議)	<u>今週は、週1回の研修日に加え放課後に研究部会も開き、研究発表会の指導案検討会を行った。</u>	授業のねらいや内容、工夫について、全員で検討ができ、研究内容の共有化につながった。	放課後を使ったので、担任の負担が大きかった。
	近隣中学校研究発表会への参加	今後、研究面でも小中の連携を強めていけるよう、協議の中で協力をお願いするよう発言した。	両校の研究テーマがよく似ているので、今後も連携を強めていきたい。	次年度は、年度当初に、研究担当者が集まり、研究内容を交流する機会を設けたい。

研究紀要を分担して執筆し、さらにできた原稿を研究部会で交換して読み合い、内容確認、校正を行うことは、研究内容を再確認できるよい機会となった。

(8) 11月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
11.1-9	機器・物品の手配	<u>電子情報ボードを学校予算で購入した。またノートパソコン、無線LAN、パネル、電子情報ボードなどを手配してもらった。</u>	研究発表会で必要な物品を準備することができた。	電子情報ボードをもう少し早く購入できればよかった。備品購入はなるべく早い時期に、計画的に行いたい。
	公開授業指導案の最終確認	<u>ICT活用のポイントや単元計画の記述内容や、誤字脱字、表記の統一など、最終的な指導案の確認作業を行った。</u>	複数で確認を行い、細かな部分までしっかりと目を通すことができた。	修正に時間がかかり予定より印刷が大幅に遅れた。
11.10-16	研究部会の開催(模擬授業)	<u>各研究部会で模擬授業を実施した。</u>	模擬授業によって、ICTの活用方法や、ワークシートの形式など、改善点が多く見つかった。	時間内に全て実施できなかったため、後日別途実施しなければならない。
	他校研究発表会への参加	本校と同じく放送・視聴覚教育の研究に取り組んでいる広島市立白島小学校の研究発表会に参加した。	番組活用の基本パターンを定めるなど、実践しやすいよう工夫している点が参考になった。	
	学校ホームページの更新	<u>公開授業の概要や活用機器をホームページに掲載した。</u>	参加者に、研究発表会についての追加情報を提供できた。	公開授業以外の内容、特に分科会に関する情報発信が十分にはできていなかった。
11.17-23	研究発表会リハーサルの実施	<u>リハーサルを行い、各自の動きや準備物の確認をした。研究発表、授業アピールのリハーサルも行った。</u>	話し方、内容、時間などの修正点がみつき、改善できた。研究発表のスライドも改善できた。	パネルディスカッションのセッティングを忘れていたため、当日大変な目にあった。
	校内環境整備作業の実施	<u>掲示物や清掃、物品の確認など校内環境整備作業を行った。</u>	仕事を分担したことで授業者は授業準備に時間を割くことができ、負担の軽減になった。	
11.24-30	研究発表会の最終確認	<u>全体会・分科会会場の設営、ポスターの掲示、校内案内掲示等を行った。</u>	各会場の環境整備を前週に済ませておいたので、作業がスムーズにすんだ。	分科会で使うプロジェクタ等を事前に設置できなかったため、当日の準備が忙しくなった。

研究発表会の開催(広島県小学校視聴覚教育研究大会)	<u>研究発表を行い、参加者に本校研究の概要について理解してもらった。授業アピールでは、授業者自らが授業のねらいや実践のポイントを説明した。</u>	短い時間ではあったが、研究の理論部分を中心に説明できた。これまでより画面の文字数を減らし、分かりやすいプレゼンができた。	表情、視線、身振りなど、参加者にもう少しアピールする工夫ができればよかった。
	<u>6年算数科の授業公開を行った。電子情報ボードを使って児童が説明したり、コンピュータで面積図を操作したりと、ICTを児童が活用することで思考、表現を引き出すような授業になるよう工夫した。</u>	全体として、内容的にも、ICT活用のパターンも、バラエティ豊かな授業を提案でき、本校研究の全体像がつかめる公開授業にできた。	教科のねらいとICT活用のねらいを合致させること、ICT活用の焦点化を図ることなどが課題である。
	<u>ポスターセッションの進行を研究副主任に任せた。ポスターセッションでのやりとりをメモする紙とバインダーを各ポスターのところに置き、実践者がメモできるようにしておいた。</u>	途中協議が途切れることも無く、密度の濃い協議ができた。参加者から授業の成果や課題について多くの意見を得ることができた。	参加者の中には十分協議に加わっていない人もいたようだった。事前の説明を丁寧にした、説明の文書を配布したりするなど具体的な手だてが必要であった。
	<u>パネルディスカッションではパネラーとして参加した。本校でICT活用を進める上で大切にしていること、工夫していることなどを説明した。</u>	パネラーがそれぞれの立場から意見を出し、それらをコーディネーターがうまくつなぐことで、建設的な協議となった。	機器のセッティング不足で、プロジェクト画面の切り替えやマイクなど、スムーズに行かないところがあった。

研究発表会では、ICT活用のあり方について、参加者からたくさんの意見を得ることができた。パネルディスカッションやポスターセッションも好評で、参加者から高く評価された。

(9) 12月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
12.1-7	研究発表会外部アンケートの集計	<u>外部アンケートを集約し、回答のグラフ化、記述意見の整理、成果と課題の整理などを行った。</u>	アンケート結果をすぐに集約したことで、校内で研究発表会の反省を行う際の資料とすることができた。	回答数が予想より少なかった。現地実行委員として参加した人が、片付けなどがあって提出する機会を逃したようだ。
	研究全体会の開催(研究発表会の反省)	<u>はじめに10分ほど時間を取り、配布した用紙に各自で反省を記述してもらってから協議を行った。参考資料として外部アンケートの集計結果を提出した。</u> <u>研究授業反省レポートの様式を提示し、月末までに提出するよう依頼した。</u>	研究発表会終了後間もない時期に反省会ができ、記憶が鮮明なうちに協議できた。外部アンケートの集約が参考になった。	用紙を研究発表会前に配布しておけばさらに時間のロスを少なくできた。研究授業の記録をしていなかった。広島県視聴覚教育研究大会の実行委員に記録を依頼すべきだった。

	学校ホームページの更新	<u>先日集約した外部アンケートの結果や、研究発表会当日の様子などをホームページに掲載した。また研究紀要申し込みについての情報も掲載した。</u>	研究発表会の様子を早い段階でホームページ上に掲載できた。研究紀要の申し込みが数件あった。	研究授業については、各指導者が年末に提出する研究授業の反省カードを活用するため、まだホームページには掲載していない。
12.8-14	研究全体会の実施(外国語活動の研究授業)	本校で始めて外国語活動の研究授業を実施した。ワークショップ型協議会では、2年目の若手教員が、担当者として司会進行を行った。	提案性のある授業と、事後のワークショップにより、研究授業のねらいを達成できた。若手教員がテキパキと協議を進めた。	
	研究発表会総括レポートの提案	<u>前週各自に記述してもらった研究発表会反省用紙の意見を集約し、総括レポートとしてまとめた。</u>	職員それぞれの意見を掲載することで、成果と課題を共有できるようにした。	学期末で忙しく、総括レポートを研究推進部会で協議する時間がとれなかった。
12.15-21	研究部会の開催	各研究部会で2学期の活動の反省と3学期の活動について協議してもらった。	学期ごとに反省と次学期の計画を立てるというサイクルが定着し、部会での協議もスムーズだった。	両研究部会とも、計画はしても実施できなかった項目があった。活動の焦点化、具体化、実施時期を明確に定めることが必要であった。
	企画委員会の開催(2月授業研究会について)	<u>2月6日の研究推進リーダー研修会の企画を立て、学校長と協議した。</u>	市教委から市内各校に参加を促す通知を出してもらおうよう学校長に依頼し、すぐ連絡してもらった。	指導講師との打ち合わせや、市教委への連絡が遅れ、いろいろと迷惑をかけてしまった。
12.22-31	研究発表会授業反省レポートのチェック	<u>提出された授業反省レポートをチェックし、内容が不足している部分は、記述を追加してもらおうよう依頼した。</u>	ICT活用の効果を児童の言葉や行動で具体的に記述するよう依頼し、分かりやすいレポートになった。	年末の時点で提出していないレポートについてはチェックできなかった。冬休み中には全て揃うよう声をかけていきたい。

研究発表会の反省をすぐに実施し、授業反省レポートも作成してもらうことができた。研究発表会が終わっても研究は継続するという意識を高めることができた。

(10) 1月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に特に関連するものに下線)	成果	課題
1.1-11	研修会に向けた準備	<u>2月6日の研修会のプログラムについて指導講師と協議し、アドバイスを受けた。</u>	研修内容や役割分担について事前に指導してもらうことができた。	さらに具体的な内容を詰め、研修会進行表を作成したい。
	研究全体会の開催	<u>3学期の研修計画と、2月6日に実施する研究推進リーダー研修会の概要について提案した。算数部会は国語科の授業提案、国語部会は算数科の授業提案を行うようにした。</u>	2月の研修会のねらい、流れ、準備計画などを全員で確認できた。	

	研究推進部会の開催	<u>2月6日の研修について、プログラムの時間配分やワークショップ研修のねらい、役割分担を協議した。</u>	ワークショップ研修で、各自の役割・動きを具体的に話し合うことができた。	司会の練習など、充実した協議になるよう準備と練習が必要である。
1.12-18	研究部会の開催(研究授業指導案検討)	<u>算数・国語の研究部会に分かれ、研究授業の指導案を検討した。これまでの取組みを確認できるよう、研究紀要をしっかりと読みながら検討するよう指示した。</u>	メンバーが入れ替わることで、研究内容の共有化が図られるとともに、研究組織の活性化につながった。	両部会とも授業構想が十分詰められていない。次週の全体会での協議に向けて、指導案を完成できるよう研究主任としてフォローしていきたい。
	学校ホームページの更新	<u>2月6日の研究推進リーダー研修会の案内を、ホームページ上で公開した。</u>	三次市内の小学校には案内文書が配布されているが、市外からも参加してもらえるよう情報を発信できた。	研修以外のページの更新作業に時間がかかり、肝心の研修案内が思っていたより遅くなってしまった。
	研究推進便りの発行	1月から2月にかけて実施されるICT活用に関する研究発表会・研究セミナーに参加するよう情報提供と参加の呼びかけを行った。	パナソニック教育財団の助成金の予算計画を見直し、旅費を捻出できるようにした。	年間でどのような研究発表会が開催されるのか、情報を早めに集め、計画的に予算を執行できるようにしたい。
1.19-25	研究全体会の開催(研究授業指導案検討)	<u>2月6日の研究推進リーダー研修会で公開する授業の指導案検討を行った。</u>	11月の研究発表会の課題として挙げられていた「ねらいの明確化」「ICT活用の焦点化」を意識した協議ができた。	複数の指導案を検討するための工夫(時間配分や事前準備)が十分にはなく、時間が足りなくなってしまった。
	地域懇談会の開催	学校の取組み(学力面について)の報告と、家庭学習に関する情報提供と協力の呼びかけを行うためのプレゼンを作成し、地域懇談会で説明を行った。	ベネッセの家庭学習に関する実態調査のデータを紹介し、家庭学習の重要性について具体的に提言することができた。	今後、家庭学習の工夫を学校としてしっかりと進められるよう、具体的な取組みを紹介したりしていきたい。
1.26-31	研究部会の開催(模擬授業の実施)	<u>これまで算数の授業研究に取り組んできた教員が今回は国語科の授業提案に挑戦する。その模擬授業に参加し、ワークシートの工夫や、ICTの活用方法について協議した。</u>	国語部会長からこれまでの研究で培ったアドバイスをもらうことができ、研究の共有化がすすんだ。	3つの授業のうち1つしか模擬授業を実施できていない。残り2つは来週に回さなければならなかった。
	他校研究発表会への参加	本校と同じくICT活用について研究している和歌山大学附属小学校の研究発表会に参加した。	ICT活用の方向性など、本校と共通した取組みや課題が学べた。会の終了後、ICT主任の教員と話ができた。	研究発表会で学んだことをレポートにし、本校の教職員にもしっかりと伝えられるようにしたい。
	研究推進便りの作成	<u>2月6日の研修会について、当日の日程と各自の動き、協議会の具体的な進行情況等について整理し、文書にした。</u>	今回は外部参加者が多いため、各職員の動きや会場準備など細かいところまで提案し、会がスムーズに進められるよう配慮した。	模擬授業の実施が遅れ、細かな内容については説明する時間を十分に確保できなかった。

教科を交換して、研究部会で、指導案検討、模擬授業を行った。抵抗感を持つ人もいるだろうと予測したが、結果は逆で、「新鮮な気持ちになれた。」「相手の部会の取組みをもう一度勉強

しなおすことができた。」という意見を多く得られた。

(11) 2月のアクション

日時	学校研究の活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
2.1-2.8	研究全体会の開催	<u>参加者名簿・配布物の確認, 会場準備, 環境整備を行った。</u>	11月の研究発表会の課題をふまえ, 今回は研究発表のプレゼン資料を準備した。	担任外の教員に会場設営等を全てしてもらった。授業者は助かったが, 一部の教員に負担が偏ってしまった。
	研究推進リーダー研修会の実施	<u>○全体の進行 ワークショップ研修の全体説明と進行を行った。</u>	時間配分や研修内容を, プレゼンで説明し, 参加者に把握してもらうことができた。	ワークショップ時の講師と研究主任の役割分担を打ち合わせておくべきだった。全体進行は他の職員に任せるべきだった。
		<u>○研究計画上の工夫点を発表 研究計画を充実させるために本校がこの2年間取り組んできたことについてプレゼンを行った。</u>	年度初めの授業研究会の実施やPDCAサイクルに基づく研究計画の実施が参考になったという感想を得た。	授業後の協議が若干延びた分, 予定より発表の時間が短くなった。いろいろな事態を予想し, 準備しておけばよかった。
		<u>○参加者アンケートの集計・まとめ 参加者に実施したアンケートを集計し, 回答結果をグラフ化した。</u>	提案した授業, ワークショップともに肯定的な評価を得た。他校との交流が深まるよい機会ともなった。	「講師の話をもっと聞きたかった」「ワークショップの時間をもう少し長く」という意見があった。次年度に生かしたい。
2.9-15	研究推進便りの発行	<u>研修会の反省(日程, 内容)についての成果と課題, 授業研究反省カード, 研究協議会記録用紙)を配布し, 期日までの提出をお願いした。</u>	日程や内容の成果・課題については配布した当日, ほぼ全員が提出した。研修会が終わってすぐ配布したのがよかった。	授業反省カードや協議会記録用紙は, まとめるのに時間がかかるので事前に配布しておけばよかった。
	次年度授業研究会日程の打ち合わせ	<u>次年度の研究発表会, 授業研究会の日程について, 企画委員会で検討した上で, 指導講師と調整を行った。</u>	今年度中に授業研究会の日程を決めることができ, 次年度の研究推進計画の具体的構想が可能となった。	研究発表会の日程が定まったので, 早い時期から学校ホームページ等で情報発信していきたい。
2.16-22	研究推進便りの発行	<u>参加者アンケートの結果と, 職員の反省カードの内容を整理し, 研究推進便りとして職員に配布した。</u>	参加者の意見・感想を紹介することで, 本校の取り組みの成果や課題を確認できた。研修会から時間をおかず配布できた。	今回の研修会の目的・意図について職員の理解が十分には得られていない面もあった。今後の課題として取り組みたい。
	研究視察団訪問への対応	ICTについて研究している他県の中学校から視察訪問があり, 授業提案・研究発表を行った。	日常的なICT活用の様子を見てもらうことができた。次年度の研究公開日を紹介し, 参加を呼びかけることができた。	

2.23-28	研究視察団 訪問への対応	ICTについて研究している 小学校(県内1校・県外1 校)から視察訪問があり、授 業提案・研究発表を行っ た。	時間に余裕があったの で、質疑応答や取組み の交流をする時間を十 分に取れた。次年度の 研究公開日を紹介し、参 加を呼びかけた。	
---------	-----------------	---	---	--

2月の研究推進リーダー研修会では、各校の研究主任から授業提案について多くの意見を得られ、今後の授業改善の課題をみつけることができた。また事後のワークショップでは、各校の研究推進の工夫を交流でき、参加者にも好評であった。

(12) 3月のアクション

日時	学校研究の 活動内容	研究主任のアクション (研究発表会の企画・運営に 特に関連するものに下線)	成果	課題
3.1-3.8	学校ホーム ページの更 新	<u>2月6日の研修会の様子や 参加者アンケートの結果、 次年度授業研究会の日 程、11月の研究発表会の 指導案をホームページに掲 載した。</u>	早い時期に次年度の授 業研究会の日程をPRす ることができた。	授業者反省を掲載しよう としたが、まだ訂正の必 要なものもあり、実現で きなかった。せつかく作成 したものなので有効活用 したい。
3.9-15	学力調査の 結果分析	1月末に実施した学力テ ストの結果をコンピュータで入 力し、各学年と学校全体の 結果をグラフ化した。	昨年度のデータと比較し たグラフも作成し、今年 度研究の成果や課題を 捉えやすいようにした。	細かい設問ごとの正答 率や、個々の成績などの 分析はまだできていない ので、校内研修の時間 を使って全員でデータの 分析をしていきたい。
3.16-22	研究部会の 開催	今年度の研究部会の活動 を振り返り、成果と課題を整 理してもらった。先日作成し た学力テストの結果をグラ フ化して配布し、振り返りの 材料とした。	1年間、PDCAサイクル に基づいた活動ができ た。学力テストの結果を 検証の資料に使うこと で、客観的な振り返りが できた。	3学期の部会活動は2 月の授業研究会以外に はできなかった。部会 の反省の時期が予定より 遅れた。
	研究全体会 の準備	次回の研究全体会で1年 間の研究の総括を行うにあ たり、各自の今年度の授業 改善を振り返り、自己評価 してもらったためのシートを 作成し、記入してもらった。	質問項目を焦点化し、 研究の視点に沿った振 り返りができるようにし た。表計算ソフトを使い、 回答と集計が簡単にで きるようにし、効率的に 総括できるようにした。	質問項目は何度か見直 しながら絞っていった が、まだ項目数が多かっ た。質問の意味が分かり づらいものもあったよう だが、説明する時間を持 てなかった。
3.23-31	研究全体会 の開催	各研究部会活動総括シ ートと、個人の授業改善自 己評価シートの整理をもと に、次年度研究の方向性につ いて話し合い、全員で確認 した。	事前にシートに記入し てもらい、それをまとめた ものを配布して協議を行 ったため、効率的に協議 できた。	異動でメンバーが大きく 変わるため、今回協議 した研究の方向性を次年 度のメンバーにしっかり 継承できるよう準備し ておきたい。
	研究視察団 の訪問	近隣県中学校の研究主任 が本校を視察訪問に訪れ た。研究推進の工夫につ いて詳しく説明した。	次年度研究推進の中心 となる若手教員にも同席 してもらい、研究推進の ポイントを再確認して もらった。	

	研究紀要増補版の製本・配布	11月の研究発表会以降に作成した研究授業レポート、研究部会活動の反省、研究の総括を、研究紀要増補版として印刷・製本した。次年度赴任する教員に配布する。	11月に作成・配布した研究紀要とあわせて、今年度の研究を網羅した冊子を作成することができた。	年度末間際に完成したため、内容を全員で確認する時間は取れなかった。研究を継続するために、4月の研究全体会等でしっかりと活用していきたい。
--	---------------	---	--	--

年度末にもかかわらず、県内外から視察団が来校した。今後も連絡を取り合い、研究交流の輪を広げていきたい。研究紀要増補版もなんとか完成した。研究発表会以降も継続して研究に取り組んできた成果である。次年度に研究を継続させるためにも、しっかりと活用していきたい。

3. 研究発表会開催の成果と課題

(1) 研究発表会を見越した研究計画の立案

研究発表会を実りあるものにするためには、開催前にどれだけ準備ができているかが重要である。そこで、今年度は、11月の研究発表会を核に、1年間の授業研究会のねらいをしっかりと定めた。4月の授業研究会は研究内容のイメージ化、5月と6月のものは授業改善の視点の明確化、9月のものは11月の本研究発表会の準備・練習など、それぞれの授業研究会のねらいを明確に持つことができた。

(2) 外部組織・団体との連携

研究発表会を開催するにあたり、外部組織・団体との連携も重要である。教育事務所や市教育委員会から、研究指定、指導主事の派遣、研究発表会の共催など、多くの支援、協力を得た。行政とのパイプ役は学校長が担う。それゆえ、研究推進について学校長と密にコミュニケーションをとり、学校長から行政に働き掛けてもらうことは、大変重要である。

研究団体との連携も重要である。本校はパナソニック教育財団から特別研究指定を受けているので、本校の取組みは財団ホームページ等で広く発信されている。県内外から本校研究発表会への参加申し込み、研究紀要の申し込み依頼が来るなど、その影響が広がりつつある。また、研究団体や教材会社などのホームページには、全国の研究発表会情報が掲載されていることも多い。研究発表会の情報を広く発信すれば、それだけ本校研究に興味を持つ人が増え、研究発表会に参加しようという人が増える可能性が高まる。今年度は十分な発信ができなかったので、次年度はぜひ改善したいと考えている。

(3) 他校との連携

研究発表会のパネルディスカッションに、視聴覚・放送教育の研究に取り組む他校研究主任を招聘することになった。これをきっかけに、互いの研究発表会や研修会に参加し合う関係ができた。研究を交流することで、相手校の優れた実践を学び、自校に取り入れたり、違った視点からの意見を得たりすることもできた。研究発表会を充実させる上で、研究交流校の存在はかなり大きいと言える。

（４）配布資料の工夫

研究発表会では研究の成果物を配布したり，販売することも多い。本校では研究紀要と，そのリーフレット版を配布した。研究紀要には，これまでの研究の流れ，理論，研究の全体構想図，実践の具体的なレポート，成果と課題，実践上の悩み，今後の方向性などを掲載した。リーフレット版は，本校の取組みの実践部分を，写真や図を使って分かりやすくまとめたものである。これまでに，自作した評価テスト集や，あるいはお土産（総合的な学習で作った杖）を差し上げるなど，趣向を凝らした配布物を用意したこともあった。あまり過剰になってもいけないが，配布物にひと工夫することも一つのポイントであろう。

（５）研究発表会後も研究を継続させる工夫

研究発表会が終わった途端，学校研究も終わってしまう，そんな状況を避けるためには，やはり具体的な手だてが必要である。

まずは研究発表会の成果と課題を分析する作業を，研究発表会終了後すぐに取り掛かることが重要である。参加者アンケートの結果をグラフ化しておき，研究発表会の反省の具体的材料とする，授業反省レポートの様式を作成し，研究発表会終了後できれば２週間以内に提出してもらうなど，早目に手を打つことが大切である。

さらに，本校では，２月にも，研究推進リーダー研修会という形で，ある種の研究発表会を開催する。しかも，これまでの研究教科を交換した授業提案を行うようにしている。これには，１１月の研究発表会での課題に対する改善を図り，研究内容の一層の共有化を促すという，２つの重要なねらいがある。

研究発表会についてのアンケート

本日は、ご参加ありがとうございました。研究発表会に関する先生方のご意見を頂戴して、次なる実践に取り組む所存ですので、ご回答よろしくお願いいたします。

まず、次の点について、お答えください。

- ① ご所属 （ 小学校 ・ 中高等学校 ・ 教育委員会や教育センター ・ その他 ）
- ② 地域 （ 市町村内 ・ その他の都道府県内 ・ 都道府県外 ）
- ③ 過去数年間に開催校の授業等を見学したことがあるか （ ある ・ ない ）
- ④ 研究発表会参加前に、開催校のホームページの研究関連部分を見たか（ 見た ・ 見ていない ）

本日の研究発表会の内容等について、次のうち、あなたの考えに最も近いものをお選びください。

4＝あてはまる、3＝少しあてはまる、2＝あまりあてはまらない、1＝あてはまらない

- 1. 研究発表会のプログラム（研究発表、公開授業、研究協議会や分科会、講演やパネル等）やその時間設定は適切だと思う。 4——3——2——1
- 2. 研究発表を聞いて、学校の取り組みの全体像が分かった。 4——3——2——1
- 3. 研究主題に即した授業が公開されていた。 4——3——2——1
- 4. それぞれの授業者が、授業展開や学習活動、学習環境等に工夫を凝らしていた。 4——3——2——1
- 5. 研究協議会や分科会では、公開授業について、授業者や参加者としっかり意見を交わした。 4——3——2——1
- 6. 研究協議会や分科会では、自分の授業づくりについて、しっかり考えた。 4——3——2——1
- 7. 廊下等の掲示物等からも、学校の取り組みを学べた。 4——3——2——1
- 8. 研究紀要に研究の過程や成果、悩みや課題が記されており、それを読んで、学校の取り組みがよく分かった。 4——3——2——1

研究発表会に参加した感想を自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。